

# ドナウ の 四季

2009年・夏季号・No.3

遠い日々のこと	佐藤 経明	1
家族でつないだバトン	木村 晶子	2
ハンガリー病院体験記	戸田 みはる	3
にわかディーラー、にわか棟梁	盛田 常夫	4
ハンガリー履歴書	飯尾 欽哉	6
インタビュー シュディ・ゾルターン氏に聞く		
	原田 知加	8
ブダペスト日本人学校	西岡 健児	
	久世 優美子	9
緑の丘日本語補習学校	望月 美和	10
留学生自己紹介		
	井上 奈央子・豊永 美恵・内川 かずみ	11
コンサート情報	桑名 一恵	13
スポーツ行事・運動サークル情報		14
お知らせ		16





## コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928 年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。  
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフヒストリー。

# 「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】  
◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込）◆A 5 判／ ISBN 4-535-55473-0 ◆日本評論社



## 体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

### 第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

### 第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



## なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判  
■ ISBN 4-535-78331-4

# 異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

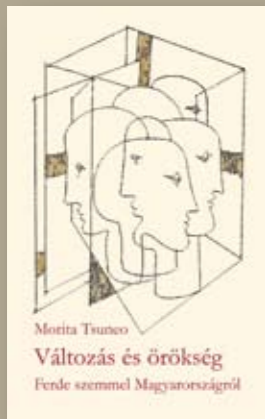
ハンガリーのポスト社会主義の現状を鋭く分析。Klub Radioや雑誌で賞賛と激論の問題作。

# Változás és Örökség

Ferdeszemmel Magyarországról Morita Tsuneo

■ブダペスト国際書籍フェア出品作品 好評発売中、2800Ft

ハンガリー人は自らの立場を誤解していないか。外国企業と外国資本に依存し、自立精神を失ったハンガリー人は、「借り物経済」の中で、お客さんのように「ゲストワーカー」になっていないか。政治家はGDPの5割を手中にし、市場経済を「国庫化」する「国庫資本主義」の道を行っていないか。政権政党のみならず、野党が陥る便宜主義とポピュリズム。借り物経済、ゲストワーカー、国庫資本主義のキーワードで解明するハンガリー社会分析。大反響を呼んだ「国庫資本主義」論を中心にハンガリー社会の病根を抉る。キリギリスから蟻にならなければ、ハンガリーの浮揚はない。



## エコノミストのハンガリー回想(1)

# 遠い日々のこと

佐藤 経明

私がブタペストを初めて訪れたのは、44年前、1965年2月のことである。当時、滞在中のモスクワを1月末に夜行列車で発ち、ワルシャワ・プラハ・ウイーンにそれぞれ数日滞在、ブダペストに着いたのは2月中旬だった。2月なのに到着の日はいずれも3都市よりも温かく、何か早春の雰囲気を感じたことも私の気持ちを和やかにしたようだった。

ここで「前置き」が少し長くなるけれども、当時の日本と旧ソ連東欧諸国との交流のチャンネルの狭さに触れておかなければならぬ。これらの国を対象にした文部省留学も学術振興会の派遣も無かった頃のことである。それは「パイプ」といったものではなく、偶然とコネに左右される細い「線」のようなものだった。1959年に9歳でプラハに来た故・米原万里の場合は、共産党幹部だった父親の仕事で来たものだから別としても、その他も何らかの「コネ」や「友好」ルートによるものが多かったと思う。

私の場合も偶然によるところが少なかった。1964年9月、後から見ればフルシチョフ平和共存路線の最後の「打ち上げ花火」だったのだが、モスクワで大々的な青年学生国際的討論集会「世界青年フォーラム」が開かれることになって、わが国でも代表団派遣用に「日ソ青年友情委員会」が作曲家の故・芥川也寸志をシャッポにして俄かに立ち上げられた。当時、日本共産党はフルシチョフ路線を批判して中ソ論争の中国側に与していたから、この委員会の実働部隊は社会党の若手や社会党に近い労組・青年学生団体が主力だった。

私は60年安保の後、いわゆる「江田ヴィジ



ョン」(1962年10月発表)で間もなく失脚に追い込まれる江田三郎ブレーンの端っこにいたためか、江田派の若手から30人余りの日本代表団のアドバイザーとして付いて行くことを依頼された。海外渡航の機会が少な

かった頃のこと、私は承諾したが、渡航費用と持ち出し外貨制限枠500ドルを合わせて当時の金で30万円負担するのに直ぐ帰るのではつまらない、せめて半年ほど滞在させてもらえないか、と当時の成田知己委員長を通じてプッシュしてもらった。そうしたら「フォーラム」終了後、翌年3月まで、モスクワ大学経済学部外国人研究員として滞在中の手配がモスクワ到着時に出来ていた。予想外だったので、私は薄いスコッチ・ツイードのスプリング・コートしか持っていなかった。

私は高層のモスクワ大学寮のZone B 14階1448号室に住むことになったが、数階下には原水爆禁止運動で国際レーニン平和賞を受けた安井郁のお嬢さんがいたし、モスクワ音楽院に音楽で留学していた小田恭子は原爆絵画で著名な赤松俊子の姪だった。事ほどそのように、何らかの「コネ」を連想させる人が多かった。これもフルシチョフの大判振る舞いで造られたルンバ記念民族友好大学には20人位の日本人学生がいたが、これは勿論、友好団体ルートによるものだった。

私はモスクワに落ち着いた後、暫くして東欧を訪れることを考え始めたが、これにはいくつか理由があった。まず旧制高校ドイツ語世代の常としてアメリカよりもヨーロッパに親近感を持っていたし、最初に書いた論文が、1948-49年を境に全面国有化が開始される前、短期間存在した一種ネップ型の混合経済である「人民民主主義経済」(中国では「新民主主義経済」)を扱ったものだったということがあった。もう1つ、これが重要なのだが、1962年の東ドイツ「新経済メカニズム」を嚆矢として、ハンガリー・チェコに経済改革の胎動が見られたからだった。10月14日のフルシチョフ追放の発表後、「フルシチョフ無きフルシチョフ路線の継続」という当時の大方の見方に反して、私は「ソ連は今後、保守化に転ずる」という判断を下していたが、東欧はどう動くだろうかという関心も強かった。

しかし、東欧を訪れるとしても専門家との面談を斡旋してくれる「受け皿」が無い。どうしたものかと思っていたら、11月末、西欧の社会党を含め、東西欧州の友党との機関紙提携樹立の旅の帰途、モスクワに立ち寄った江田ブレーンの筆頭格、加藤宣幸(社

党機関紙局長)と同行の松下圭一(法政大学教授)に出会った。この二人が訪問して来たばかりのポーランド・チェコ・ハンガリーの、日本で言えば共同通信社に当たる通信社に電報を打ってくれたのである。出発は翌1965年1月28日だったが、出発前、チェコのCTKモスクワ特派員、インドジツヒ・スークをチャイコフスカヤ街の自宅に訪れたら、「最近の様子は知らないが、まあ、自分の眼で良く見て下さい」という言い方に何か「翳」があるので「おや」と思ったが、3年後、「プラハの春」当時、ドゥブチェク・ブレーンの1人として名前が出て来た。

キエフ駅からの夜行列車は戦前からのワゴン・リーの寝台車だったから快適だった。ポーランドでは1956年のゴムルカ復帰の政変「10月の春」の熱気はとつと失せ、保守化のサイクルに入っていたから、専門家の間には投げやりな雰囲気があった。グランド・ホテルでは秋のショパン・コンクールの下見に来ていた21歳の中村紘子と出会い、夕食をともにした。チェコは私の到着直前、1月末の党中央委員会総会で基本的なところはハンガリー型の経済改革案を決定していたが、「中央委員会は貴君らの意図をどこまで理解した上でこの改革案を採択したのか」という私の問いに、暗い表情の経済研究所(オタ・シーク所長)学術書記・チェストミール・コジュウシニークから返って来た答は「神様しか知らない」というものだった。当時の雰囲気は分かるというものである。

ハンガリーは唯一、いくらか明るかった。文字通り最初に会ったハンガリー人経済学者は、資材・価格庁長官・チコーシュ・ナジ・ベラだったが、当時バジリカ近くの庁舎で議論して午後4時を過ぎると急に立ち上がり、「女性秘書たちが帰宅を急いでじりじりしている。夜8時に君のホテルに行くから、夕食をしながら議論を続けよう」ということになった。こんな対応は、ソ連は勿論のこと、ワルシャワでもプラハでもなかったから、私のハンガリー第一印象はこの時に形づくられたのである。

(さとう・つねあき・横浜市立大学名誉教授)

特別寄稿





# 家族でつないだバトン

木村 晶子

## 家族で走ったミニマラソンリレー

5月17日に待ちに待ったK&Hマラソンリレー大会が開催された。国会議事堂の周りを走るコースである。家族で出場するミニマラソンリレーは、1人2.1Kmを走り、3人でバトンをつなぎ競技。走る順番をどうしようか、夫と相談した。スタートは大人数が一斉にスタートするので子供には危ないし、私はミニマラソンリレーの後に7Km x3のリレーにも出場することになっているので、私が第1走者となり、第2走りに子供を走らせ私が一緒に伴走することにした。密かに自主トレをしていた夫にアンカーを任せることにした。

満を持して5月17日の朝を迎えた。会場に到着すると「これから走るんだ」というワクワクした気持ちと少しの緊張で私のやる気のスイッチが入った。

競技で2.1Kmという短い距離を走るのも、マラソンリレーの第一走も初めてで、いつに無く緊張していた。走る前は1Kmのペースをどうしたら良いのか迷っていたが、スタートしたらいろいろ考えている暇はなかった。案の定、周りの早いペースにつられ、最初の1Kmを約4分/Kmで通過した。呼吸はきつかったが、足のほうは大丈夫だったので、ペースを意識せず、とにかく前に前について走った。スタート地点に戻ると、第2走者の息子がかなり興奮した様子で待っていた。私がバトンを渡すなり、息子がダッシュしてしまった伴走の私にはダッシュする気力はなく、後ろを振り返りながら走る息子に「すぐに追いつくから、前向いて走って!」と叫んだ。スタートから400mほどで息子に追いつき、そこから一緒に走った。「僕の心(心臓)が止まりそうだ～」と何度も叫ぶ息子に、「どんなに遅くても止まらず走り続けようね」と励まし続けた。途中歩くことなく、思ったよりも早いタイムで、2.1Kmを完走した。そして、第3走者の主人にバトンをつないだ。

夫もがんばり、私たちKimura Family チームは、32分58秒という好タイムでゴールすることが出来た。20チーム近く出場した日本チームの中で、4番目のタイムだった。予期せぬうれしい結果だった。ハンガリーでの家族の思い出がまたひとつ増えた。

## リレーの掛けもち

ミニマラソンリレーが終わり、今度は7Km

x3のハーフマラソンリレーに出場するため、日本人会事務所に戻った。「もう十分にアップ(準備運動)してるから、問題ないね～」と盛田さんが冗談をおっしゃっていたが、すでに4Km走った脚には若干疲労が残っていた。

11時にマラソン/ハーフマラソンリレーがスタートした。500チームが一斉にスタートする。私の目標タイムは35分。1Km5分のペースになる。無理にスピードを上げず、確実にバトンを繋ぐ走りをすると思った。まだ5月なのに陽射しが容赦なく照りつけ、思いのほか体力を奪われたが、キロ5分のペースで安定した走りが出来た。この大会への出場はこれが最後という思いがあったので、王宮や鎖橋などの景色を目に焼きつけながら走った。7Kmを35分20秒ほどで走った。もう少し速く走れたと思うが、ミニマラソンリレーで2周した後だから、これは納得の行くタイムである。私の相棒のハンガリー人女性は第2走者と第3走者を兼ねていたから、1人で周回コースを2周、14Km走った。二人でつないだ私たちのチームは1時間50分53秒でゴールした。ハーフマラソンリレーに出場した女性39チームの中11番目のタイムだった。

## あと1レース

ハンガリーでの最後のK&Hマラソンリレー大会が終わった。走り終わって、夫から「最後だから国会議事堂をバックに写真を撮ろう」と言われて、自然と涙があふれてきた。走るきっかけを与えてくれたハンガリーの生活も残すところあと数ヶ月。寂しい気持ちに襲われた。

ハンガリーでのランニング生活の締めくくりは、ナイキブダペストハーフマラソンと決めている。2年前の初ハーフマラソン挑戦でみると惨敗。両膝も痛め苦い経験をした。去年の大会は、順調な練習を積むことができ、故障には十分に気をつけることができたので、目標タイムには遠く及ばなかったけれど、納得の行く走りが出来た。そして今年。帰国の準備と重なるので練習に不安はあるが、悔いが残らないようにハーフマラソンを走りきって帰国したいと思っている。

# ハンガリー病院体験記

戸田 みはる

私は一昨年の12月、長いハンガリーの生活を終え日本に帰国した。ハンガリーでの生活は10年3ヶ月。ハンガリー留学時代、私は良く病院に通った。ハンガリーの病院システムが良く分らなかったから、病院に行くのは本当に勇気がいった。ブダペストの病院に一度もかからずに帰国する人も多いと思うが、私は違った。病院では良い思い出も苦い思い出も体験した。

初めて病院へ行ったのは中耳炎になった時。鼻風邪を引いて鼻のかみ過ぎによる一過性のものか、軽い中耳炎と勝手に決めていた。自然治癒するだろうと高をくくっていたが、痛みが激しくなり、数日後には歩くのもつらいほどになった。どうにもならず病院に行く決心をして、家主さんの付き添いで病院へ急いだ。

病状は思ったより悪く、出血を伴っていた。お医者さんに「なぜ、こんなになるまでほっといたのか!」と怒られてしまった。お医者さんは意外な自宅療法を教えてくれた。ハンカチ大の布、もしくは手のひらサイズの中着袋に塩を詰め込み、それをガスコンロで温めて耳にあてる。自宅で試してみると、なるほど、塩は長時間温かく、耳がポカポカして気持ちが良い。今までの痛みが消え心地よく幸せな気分になった。

高熱が出た時にも病院に行った。日本ならまず、「解熱剤を飲み安静に」と言われるが、ここでは「水風呂に入り、熱を下げると良い」。日本では絶対に聞けないアドヴァイスだと思う。原始的な方法とは思ったが、確実に効果はあった。もちろん、抗生物質も処方されたが、1日1錠で2～3日分渡されただけだった。日本に帰国し、風邪で病院に行った時は、錠剤や粉薬の計5種類の薬を渡された。医師によって治療方針は違うだろうが、私にはハンガリーの医者の方が理にかなっていると思う。

この二つの事例は良い思い出でもあるのだけれど、火傷をした時は診察を受けるまで右往左往して、辛い思い出になった。不注意から足に大やけどをし、10cm以上の水泡ができた。水泡が破裂しないか気にしながら病院へ向かった。当時、私は11区に住んでいたから、本来なら11区の病院に行くところだが、知人から12区のヤーノシュ病院を勧められて、そこへ向かった。

病院の入り口に受け付け(門番)に症状を説明したら、緊急病棟に行くように指示された。ヤーノシュ病院を知っている人は分かると思うが、この病院の敷地は広大で、入口と緊急病棟は両端に位置している。片足を引きずりながらやっとの思いで緊急病棟に着いたが、病棟の光景にびっくりした。次から次へと救急車で患者が運び込まれ、40～50人ほどの人が治療を待っている。大きな部屋にストレッチャー(足つき担架)が並べられ、人が頻繁に行きかっている。頭から血を流して倒れている人もいれば、順番を待ちながら楽しげにおしゃべりする人もいた。

どこが受付でどんな順番で診察されているのかが分らず、しばらく呆然と突っ立っていた。受付らしい窓口を見つけ質問しようと近づいたら、周りの人が「順番が違う!」、「割り込むな!」と声を上げる。私はそれを無視して「受付」に入り、症状を説明した。しかし、「私にはわからない。多分ここではないと思う。他の病棟で聞いてみて」という。もう一人の人は、曖昧に「多分、皮膚科病棟だと思う」と場所を教えてくれた。

「外国の病院だから仕方ない」と自分に言い聞かせ、片足を引きずりながら皮膚科病棟を探す。同じような病棟が並んでいるから、見つけるのは簡単でない。やっと思いついた皮膚科病棟受付で、「ここでは診ない」とあっさり断られ、「整形外科に行くように」とたらい回しされた。病院内の広い敷地を何度もぐるぐる回り、気力を失いながら、整形外科病棟を探し、やっとの思いで整形外科病棟に辿り着いた。

「今度こそは!」と病棟内に足を踏み入れた。比較的静かで20人くらいの人が順番を待っている。受付のカーテンは閉まったまま。とりあえず椅子に座って気持ちを落ち着かせてから動こうと思った。5分ほど経って、部屋から看護師が出てきた。その途端、座っていた20人が一斉に看護師に近づきカードを渡そうとする。看護師は無造作に3～4人のカードを取ると、部屋に戻った。初めは何が起こったのか分からなかったが、これで診察の順番が決まることが分かった。到着順ではなく、カードを渡した順に診察が行われようだ。次に看護師が出てきたら、私も身分証明書(パスポート)を渡そうと準備した。看

護士が出てくる度に、パスポートを渡たそうとするが、受け取ってくれなかった。そうこうしているうちに次々と新しい患者が待合室に来て、看護師に凄いい勢いでカードを渡していく。その勢いにすっかり弱気になって、結局、私はパスポートを渡すチャンスを失ってしまった。それから数時間経ち、人が減ってきたところで、やっとなパスポートを渡し、診察にたどりついた。なんとも不可解な外来受付である。後から知ったのだが、多くの病院ではこのような患者受付が常態化している。日本人にはまず理解不能なシステムである。

このように診察にいたるまで数時間も病院内で右往左往して気持ちが萎えてしまったが、診察してくれた医師は素晴らしい先生だった。それまでの苦労が一気に忘れられるとまでは言えないが、とにかく親切だった。私はしばらく通院することになったが、その先生は私が完治するまで丁寧に診察し、適切な処置をしてくれた。

水泡が落ち着き、包帯が取れた頃、先生は私に赤ちゃんクリームを渡した。赤ちゃん用の低刺激性の市販のクリームである。本当に効くのか心配になり病院の近くの薬局の薬剤師に聞いてみると、「火傷は火傷薬、赤ちゃんクリームなんて使わないよ」と言われて迷ったが、先生の指示通り、赤ちゃんクリームを塗った。その効果があって、足全体にあった火傷の跡は綺麗に跡形もなくなった。中耳炎の塩袋や熱さましの水風呂に続き、意外な方法を教えてもらったが、効果は抜群だった。

ちなみに、私が行った病院では、支払いは一切診察室内で行われた。日本のような「会計」窓口がないので、診療後に、その場で医者が領収書を発行し支払った。先生や看護師にお礼をお包みすることもある(ハンガリーで悪名高い習慣)。治療費やお礼も一切とらずに治療してくれた先生もいた。

国の違いを考えさせられたハンガリーの病院体験であった。



# にわかディーラー、にわか棟梁

盛田 常夫

わが社はソフト開発会社。机とコンピュータさえあれば仕事ができる業種。工科大学に接する古いアパートのフラット2軒をぶち抜いたものが事務所になっている。築百年ほどの建物で、エレヴェータも乗るのが怖いほどの骨董品。事務所は日本流の2階にあるからエレヴェータを使う必要はないが、「誰が乗った時に落ちるのだろうか」と心配している。まさにロシアンルーレット。エレヴェータが落ちれば、建物も傾き、不動産価値は激減するだろう。

このフラットの前の持ち主はハンガリーで著名な弁護士のバーランディ・ピーテルで、後に法務大臣を務めた。現金で売却代金が欲しいというので、MKB銀行で落ち合い、1000万Ftを超える現金をビニール袋に詰め込んだ。鞆に入れるより、この方が安全なのだと言っていた。息子のゲルゲイはELTEの法学部を卒業し、現在、若くして社会党の幹部会員になっている。こういう末広がりな家族のフラットだと有り難がっていたが、如何せん、古すぎてリノベーションには限界がある。わが事務所に営業機能はないので町中にいる必要もないが、工科大学との関係からここに留まってきた。しかし、大学との関係も次第に変化し、地下鉄工事などで交通渋滞がひどくなったので、移転のチャンスを探っていた。

ハンガリー事務所の経費は円建てだから、ここ5～6年、超円安状態で四苦八苦してきた。移転先を探し始めたが、100円＝140Ftでは適当な物件は高すぎて手が出ない。あまりの円安でいったん移転計画を凍結した。

## にわかディーラー

昨年夏のビッグマックPPP(ビッグマック価格で測った購買力平価)を見ると、対ドルでユーロは5割高、フォリントも3割高なのにあたいし、円は対ドルで3割安。超円安状態だ。ここ数年は円建て経費の高騰で大分損をした。ところが、秋に勃発した「経済危機」で風向きが変わった。待ちに待った円高への転換が始まった。乗用車購入資金として貯めておいた虎の子の円貯金、事務所の改築用の増資円資金を使えるチャンスがきた。

円高に加えて、ハンガリーの不動産市場

の急落である。これを逃す手はない。しかし、わが社は不動産会社ではないから、親会社が右から左へと円資金を流してくれるわけではない。グループ全体の経営が厳しくなる見通しなのに、「ハンガリーの不動産に投資する」意義を説得しなければならない。

こうして、昨年暮れから不動産の選定と増資による購入資金調達スキームを練ってきた。1年以上も前から目をつけていた2～3の物件は、これだけ時間が経っても売れ残っていた。他方で、年初からフォリント通貨の底割れが始まった。増資が決まった今年2月初めには、100円＝260Ftを割る暴落状態になった。半年前には1000万円で1500万Ftしか換金できなかったものが、2600万Ftに換金できる。1000万円で実に1000万Ft以上もの差益がでる。不動産は億単位の物件だから、この差益は大きい。1億円の投資であれば、昨夏に比べて1億Ftもの差益がでる。

ところが、本社での増資決定を受けて当地で増資手続きしているあいだに、フォリントが値を戻し始めた。出資書類の翻訳や書類整備に時間がかかる。100円＝230Ftのレートでベースに増資を決めたが、送金された資金が使える時には230Ft割れの状態になってしまった。

それから不動産購入代金の支払い期限まで、為替動向をにらむディーラー・モードになった。ロンドン市場が閉まる頃に、ニューヨーク市場が開く。深夜にニューヨーク市場の動向を見ながら、東京市場が開くのを待って、ドル、円、ユーロのクロスレートの動向とにらめっこする日々になった。世に為替専門家と呼ばれる人は多いが、誰も為替を確実に予想することはできない。一時の儲けに目がくらみ、為替や株のディーリングだけで生きていけると錯覚している若者は多いが、実際のところ、プロのディーラーでも為替を予測することはできない。株や為替の変動に賭けるのは、本質的にカジノの遊びと変わらない。

不動産購入代金の支払期限が近付いても、100円＝230Ftを下回る水準で為替が留まっていた。売主に違約金を払ってでも円が再び強く振れるまで支払いを延ばすか、それとも増資分の資本不足のままで換金す

るか決断に迫られた。最後のチャンスは3月末の円資金の戻りである。3月の決算に合わせて、円資金が日本に戻ってくる。そうすれば外貨売り円買いになるので、一時的にせよ、円高が進行する。事実、3月末の1日だけ、突然、円平価が対ドル、対ユーロで高騰した。ニューヨーク、東京での円急騰の流れを確認し、近所にあるMKB銀行に8時の開店と同時に駆け込んだ。レートを確認して、資金の6割をフォリントに換え、さらに午前中の流れを見て、午後に残りの4割を換金した。平均で100円＝237Ftで換金することができた。資本不足を免れただけではない。100円につき7Ftの差益で不動産取得税(不動産価額およそ6%)の分を賄えることができた。翌日から円は再び230Ftのレベルに落ち、それ以後は200～210Ft前後のボックス圏に留まっている。この1日だけの円の急騰がなければ、資本不足になっていた。

## 改築工事

新事務所は12区の丘の斜面に建てられた3階建ての邸宅である。1000平方メートルの敷地があり、どの階のテラスからも国会議事堂が正面に見え、そこから北東側のブダペストの街並みが町の境界まではっきり見える。私邸としては文句のつけようない物件だが、事務所としての利用には大幅なリノベーションが必要だ。物件引き渡しから、大規模な改築工事を進めることになった。

築10年に満たない高額物件だが、窓枠はハンガリーで一般的な木製、門扉の柵も木製、庭やテラスの手すりもただの鉄棒にペンキを塗っただけのものだ。木製の窓枠は見栄えは良いのだが、雨があたるとすぐにペンキが剥げ、10年もすると閉まりが悪くなる。定期的にペンキを塗り替え、手間暇かけて維持修理しないと、木製の窓枠は美観や機能を維持できない。同じことは柵についても言える。どの家もそれほど手間暇をかけないから、窓枠も柵もペンキが剥げて、見苦しいものが多い。鉄製の柵や手すりについても同じことが言える。以前から、ヨーロッパでアルミサッシのような窓枠やアルミ製の柵なら売れるといろいろな人に提言しているが、今でもそのような製品はハンガリー(ヨーロッパ)市場にない。もっとも、ステンレス製の手摺

(てすり)を製造している会社がブダペストにあることは分かった。安くはないが、ベランダと庭の階段の手摺をすべて交換することにした。

我が家は10年ほど前に窓枠も扉の柵もすべてプラスチック製に替えた。ウィーンのバーデンを旅行した時にプラスチック製柵の存在を知り、ブダペストで販売店を探し当てた。ドイツの技術で製作されたライセンス製品で、15年保証が付いている。実際、今でも新品のように白く、手入れが不要だ。ところが、ハンガリーの友人にそのことを話すと、「プラスチックは駄目」という答えが返ってくる。コメコンのプラスチック製品は確かに貧弱ですぐに壊れたり、黄ばんだりする。ところが、先進国のプラスチック技術ははるか先を行っていて、電子部品や自動車部品の多くが硬質のプラスチック製品になっている。パナソニックがチェコでカラーテレビの工場を建設した時に、せめてプラスチック部品だけでも現地調達できないかと考えたが、規格にあう品質の製品がなかった。一言でプラスチックといえども、その品質にはピンからキリまでであるが、一般のハンガリー人はまだそれを理解できないようだ。

我が家の柵を取り付けた会社に電話したが、すでに倒産していた。インターネットで探したが、ブダペストにはプラスチック製の柵を販売する会社がなかった。この製品のマーケットが広がっていないのだ。見つけた会社はバラトン湖西方の町にある会社。引き合いがあるから頻りにブダペストに来るといっているので、この話はまとまった。

窓枠の総入れ替えは、やはり以前に我が家の窓を取り換えた会社に発注した。セーケシュフェールヴァールに製造工場をもつ大きな会社だが、こども市場が広がらないのに同業者が進出してきて経営に苦勞しているようだ。大小合わせて50枚以上の窓の交換である。発注から納入まで4週間かかる。これだけの数だと、トラックから品物を下すだけで、たいへんな仕事になる。

ハンガリーのプラスチック製窓枠市場には、3～4社の外資系の会社がある。低級品から高級品まで選択できるが、まだまだマーケットが小さく、どこも苦勞しているようだ。わが事務所の発注がこの会社の今年の最大の受注だったというから、やはりハンガリー市場だけを相手にした製造・販売ビジネスは難しい。

## にわか棟梁

新築の場合には、棟梁の仕事もやってくれる建築会社に委託しなければならないが、改築工事にその必要はない。業者統括の仕事も委託すれば、工事費は確実に4～5割は高くなる。だから私が棟梁となって、業者を選定し、仕事を発注することにした。

改築でポイントになるのは、大工と塗装職人。簡易壁の取り外しから、化粧板による補修、階段の新設、ドアの交換、床張り、窓枠補修など、有能な大工は改修工事においてキーマンになる。塗装職人も、外壁や内壁の塗装だけでなく、改修工事で壊される壁の補修が適宜、必要になる。

一番時間がかかったのは、窓枠の総入れ替え工事とその後の補修工事。これだけの数だと、窓の取外しと取付けだけでかなりの仕



事量になるが、取外しによって壁が壊れたり、新しい窓枠と壁に大きな隙間ができたりするから、それを補修する工事が必要になる。窓の取付け業者は最低限の補修しかしない。だから、タイル業者、内装業者、石材業者に指示して、補修を進めるしかない。そして、最後の仕上げは大工に頼む。ふつうの大工はそのような仕事をしないが、私が信頼する若い有能な大工は万能選手として重宝した。

ここまでの仕事は外装的な部分だが、事務所の内装工事として大きいのは、LAN回線と電気回線工事である。床を上げて、その下にすべてのケーブルを埋め込む。回線の敷設が終わり、床上げして最後にカーペットを敷くまで、1ヵ月近い工事になる。ガスボイラーの交換と配管の新設工事も発注したので、毎日、4つ5つの業者が同時に仕事する状態が続いた。

ほとんどの業者は朝の7時あるいは8時から仕事する。朝のラッシュを避けて、時間が計算できる早朝から仕事を始めたいという。だから、業者の都合に合わせて建物の鍵を開ける。ついでに屋内外を良く見回って、仕事漏れがないかをチェックし、改装の進行状況に応じて、どの業者に何時どの仕事をやらせようかを指示する。まさに現場監督、にわか棟梁である。

## コネで見つける業者

大工、窓総取換え、塗装、タイル貼り、ボイラー取替・排水工事、電気配線、LAN回線敷設、床上げ、階段手摺、扉の柵交換、石材加工(階段)、テラスの日除け取付、エアコンの設置、机の設計・製作、会社看板製作など、実に15余の業者を相手にした。この三分の一はこれまでも仕事を依頼したことがある信頼できる業者だが、残りは新たに探し出した業者だ。多くは知人の紹介で関係をつけた。たとえば、友人のデ杯テニス選手の甥っ子で、私のテニスコーチのガールフレンドの弟が大工。このテニスコーチは別の女性と結婚したが、この有能な大工には事ある度に仕事を依頼している。タイル業者は隣家の工事を知り合った。この業者がたまたまステンレス製の手摺製造の会社経営者の名刺をもっていたので、連絡を取って製品を確かめに会社を訪問した。タイル材料はフィットネスクラブ知り合った業者の店で私が選定して発注したし、他の業者はインターネットで調べた。これだけの業者を相手にすると、現在のハンガリーの小規模事業者の仕事ぶりや業種ごとの状況が分かって面白い。しっかりと仕事をする業者は確実に増えている。期日や時間を守り、手抜きのないきちんとした仕事をしなければ、業者としての信頼は得られない。すべてではないが、ほとんどの業者に合格点をつけることができる。

今、改修工事の最終段階を迎えているが、ガレージのタイルをはがしたら、床のコンクリートに大きな穴が見つかったり、プラスチック製の柵を取り付ける段になって、3m近い高さのレンガの門柱が揺れ動くことが分かったり、改修工事を始めてから分かった不具合がたくさんある。前の所有者も建売物件として購入したからそこまで目が回らなかったのか、それとも不具合を修理する資金がなくて手放すことを決めたのか。どちらにしても、徹底的に改修するしかない。



## 商社マンから料理屋店主へ

飯尾 欽哉

1979年6月ブダペスト空港に降り立った。1983年7月まで4年に及ぶ駐在員生活が始まった。担当は総務・経理兼ソフト部門全般の営業(化学品、物資、非鉄、農水産、繊維)。所長と私の2人に現地雇員6名の小さな事務所であった。社会主義体制の真っ只中において仕事の行動半径には制限があったが、駐在期間中ハンガリーの田舎を約30万キロ走破した。赴任後2年目から加わった家族と多くの友人知人に囲まれ、それなりに充実した4年間の駐在生活であった。ハンガリーを語る上で忘れることのできないいくつかの思い出話を記しておきたい。

### 商社マンとなる

1970年4月入社。5年の貿易経理担当を経て予てより希望の営業マンとなった。配属先は「農業部」。売買の仲介を通じて単に手数料をとる日銭稼ぎと違い、新商品の開発から登録・普及・拡販に至るまで最低5年以上を有する息の長い仕事である。例えば私の駐在時に紹介したいくつかの商品は20年後に大きな商いとなって実を結んだ。持ち込んだ新商品が商売となって利益を生む間に駐在期間が過ぎてしまうという商品の性格上、農業を取り扱う商社は少ない。「農業」というだけで毛嫌いされる昨今の風潮は業界への新規参入を妨げてもある。

### ハンガリー農業視察団の訪日

1978年秋、ナジ・バーリント(農業省植物防疫局長)、コンコイ・イシュトヴァーン(全農副総裁)、シーグラール・ジュラ(化学品輸出入公団部長)、コトン氏(バダチヨニ国営農場主)の4人からなる農業視察団が訪日した。その受け入れを担当したことが、その約1年後に辞令を受けたハンガリー駐在のきっかけとなった。社会主義体制の下でチェコと同様な工業化を進めていたハンガリーは、1970年代に入って農業立国を目指す政策に重点をおき、70年後半には旧COMECON諸国の中で唯一食糧の自給自足が可能な国となった。社会主義国からの視察団の日本受け入れには種々難しい問題があったが、食糧増産に不可欠な肥料・農業・農機具等の農業関連資機材を広く扱う私の会社が日本招聘の窓口となった。

日本では農水省はじめ関係官公庁に表敬挨拶の後、日本の有力な農業製造会社やその研究所、試験圃場のほか、近郊の篤農家を訪問し、日本農業の実体を垣間見てもらった。空港の出迎えから見送りまで、朝起きて寝るまでのフルアテンドの1週間を通じて、一行4人との友情が芽生えた。ホテルの一室で4人が集まりハンガリーの地酒であるパーリンカで朝っぱらから小宴会が始まっていたところに呼び込まれ、その後のスケジュールに支障をきたしたこともあった。夜は日本食に舌鼓を打ち、神田芸者と共に他愛の無いゲームに興じた。熱海の温泉で撮った全員オールヌードの写真は今も良き思い出の品である。その後、この4人には色々なお世話になるのだが、一行4人のうち既に3人がこの世にいない。

とりわけ「ゴッドファーザー」と私淑したコンコイさんは、3年前に日・ハン旧農業関係者が一堂に会する「同窓会」への出席を前に急

性白血病で急逝、葬儀の間じゅう溢れる涙を押さえ切ることができなかった。好々爺然としたコトン氏の経営する国営農場で作られたバダチヨニケーキニエル(辛口白ワイン)とスルケバラート(中甘白)は30数年前から日本に輸出されている。氏から頂いた木製の手作り匙とフォークは私の大事な宝物である。シーグラールさんとは1987年から駐在したジャカルタで偶然にも同じ駐在員として旧交を深めたが、深酒が祟って急性肝炎を患い現地で帰らぬ人となった。ただひとりナジさんが健在だが、30数歳の若さで局長を勤めた共産党員のこの優秀な官吏は、現在難病に取り付かれ家を出ることもままならないのに、「同窓会」に杖をついて顔を見せてくれ、参加者一同涙と抱擁の中で再会を喜び合った。

### 米の機械移植プロジェクト

1970年代当初、ハンガリーにおける米の年間需要は約10万トン。需要の多くがソーセージ等、不足がちな肉の増量剤として使用されていた。国産米が凡そ7~8万トン、残りの2~3万トンを輸入する必要があった。当時の米の総作付面積は約3万ha。異常気象が災いしてha当り3トンあった平均収穫量が2トンを切りはじめ、貴重な外貨節約の為には米の増産が急務とされていた。米作りといえば2000年以上の歴史をもつ日本の米作り、それも機械による米の移植栽培技術に白羽の矢がたった。因みにハンガリーは米作りが可能な気象条件の北限である。日本の東北地方、北海道の米作りを手本として技術と機械を導入することになった。日本は農水省の下部団体であるAICAF、ハンガリーでの受け皿はKITE(国営農場と協同組合が主要作物毎に合体したハンガリー最大の生産者団体)が中心となって「日本式機械移植栽培による米作り」が始まった。AICAFからは米作りの専門家である富田富夫博士が孤軍奮闘し、3年に亘る技術移転を通じて特に米作りに寄せる日本人の魂を吹き込む努力を重ねた。KITEではマジヤール・ガボール総裁をヘッドとしてアダニール部長や多くの技術者がこのプロジェクトの促進に協力してくれた。普段から農業関係で出入りをしてきた私が各種情報の伝達役と関連資機材の輸入を担当した。3月半ばのまだ冬が抜けきらない時期にグリーンハウスの中で手作りの育苗箱を使って種を蒔き、約1ヵ月半後には約15センチに育った苗を圃場に移して機械移植する。ずんぐりむっくりの健康な苗を作るためにはハウス内の適切な温度調整と水管理が不可欠である。徒長(伸びすぎのひょろひょろ苗)を防ぐため、富田先生が命名した「スカート方式」は当時の育苗地で有名な言葉となった。暖房で蒸れたハウス内の温度を下げるためにハウスのビニールをめくり上げ朝の冷気呼び込むのである。畑を改造した田んぼ作りには多くの苦勞をした。最低でも1haある大きな畑を、水管理や除草管理、更には機械で移植する苗



の補給を容易にするために畦道を作って小さな区画にする必要があった。3月後半からの苗作りから始まって、5月中~下旬に田植えが終わるまで、富田先生はKITEの近くにあるゲストハウスに通訳と共に泊まりこんだ。私はブダペストから毎週末になると片道丁度200キロを走ってこのゲストハウスを訪れ、カレーライスを作り、日本酒を飲みながらの反省会が続いた。育苗場や圃場を毎週600キロ近く走り回った。5月初旬、日本から持ち込んだ鯉のぼりが翻る中、改造を重ねたクボタの移植機でコトコトと苗を植え付けていく様に感涙した。富田先生は絵画や音楽などの多彩な趣味があった。オペラ鑑賞の後、ある場面の一瞬を水彩画で描いた一品はマジヤール氏に贈って大変喜ばれていた。そのマジヤール氏は後に農業省副大臣となってハンガリーの農業発展に尽くしたが、惜しくも60歳を前にしてこの世を去った。富田先生はその後日本での米作りに教鞭をとられたと聞かすが、学生達とのコンパの帰りに自転車から転んでそのまま帰らぬ人となったと聞いている。5月中旬、無事田植えを終え、泥を奇麗に洗い落とした後の機械にウィーンから持ち込んだ日本酒でお清めをして、参列者一同の努力とご苦勞に感謝した。突如、富田先生から「飯尾さん、歌ってください」・・・「では、荒城の月を」・・・稚拙な歌声と共に富田先生の奏でるトランペットの調べが夕焼けに拡がって流れた。当時日本語の通訳を務めてもらったマイクロシュ君は、その後在日ハンガリー大使館の領事を経て現在は貿易のコンサルタント、奥方は会計会社の役員となって進出日本企業の会計監査等で活躍されている。

初年度の収穫はha当り5.5トンの大成功を取め、翌年の田植え時にはバスを連ねた小学生が社会見学にきてくれたが、その後このプロジェクトは当初の目的だった1万haには遠く及ばず、主に外貨予算の問題から4年目以降は品種改良用の米作りに役立てていたと聞く。初年度に獲った日本品種のキタコガネ米の稲穂は、額に飾って我が家の家宝となっている。

### 商談

私の担当する扱い品目は多岐にわたっており、毎年200回を超す商談を経験した。商社の中でも当時これだけの数の商談をこなす営業マンは少なかったと思う。特に国の外貨予算枠が決定されてからクリスマス休暇に入るまでの期間は多忙を極めた。早朝に出社してテレックスをもぎ取り、そのまま貿易公団に向かう。途中の赤信号で文面を讀んで車内で交渉の作戦を練るということを経験した。一件100万ドルを超すような商談は日本からの取引先を巻き込んで難交渉になることが多かったが、ホテル部屋での打合せや公団の待合室には盗聴マイクが仕掛けられている懸念があったから、ホテル部屋に麻雀牌を持ち込み、ジャラジャラと大きな音を立てさせながら事前打合せをしたこともあった。取引先との夕食が終わったあと事務所に戻り、夜明けまでテレックスを打つことがよくあった。今のようにパソコン



などという代物がなく、タイプで穴を開けた鑽孔テープを使って送信機で送るのだが、穴を開けるのを忘れて最初からタイプし直すという苦い経験を思い出す。

### 私生活

着任して約1年弱は单身生活を余儀なくされた。ある日公団輸入部長との商談の後で、「ワイシャツにかけけるアイロンがなくて困っている」と話して事務所に戻ったところ、電話が鳴り「直ぐに来い」と言う。何か失敗をしでかしたかと恐る恐る部屋に入ると何と机上一台の真新しいアイロンが置いてあった。「ミスター・イオ、此処は共産圏だ。欲しい物は何でも手に入る。困ったことがあったら言え」と片目を瞑ってみせた。そんな時代であった。

1980年初頭の日本人の数は150名程度で、その多くが商社、銀行、留学生、大使館関係者、ヒナの鑑定士であった。当時の日本人会は100名足らずのこじんまりしたものであったが、親睦団体として良く纏まっていたと思う。春先には日本から送られた8ミリ映画の「紅白歌合戦」を楽しんだ。年末にはドイツから料理人を呼び寄せて「寿司大会」を催し、多くの在留邦人が集った。参加者全員に概ね均等に握り寿司が行き渡るのだが、残った寿司をどう配分するかという段になって、「子供より大人が優先!」と言って騒いだのはどうやら私だけだったらしい。今もってそんなことを思い出す。やはり「食いの恨みは恐ろしい」。何しろ当時は日本食屋どころか中華料理屋もなかったのだから。

数年前にハンガリー滞在30年記念のパーティーを催したヒナ鑑定士の広江さんは、派遣員10数名のリーダーとして昼夜の激務を通じて貴重な外貨稼ぎをする先鋒を務めていた。同じヒナ鑑定士だった加藤弘治さんは良き友人である。仕事ではお互いに多忙を極めていたが、特に3~5月の米作りで忙しい折には日本からの来客のアテンドを頼んだり、3人の息子の遊び相手を押し付けたりして、今もって頭があがらない。現在は故郷の讃岐で保険代理店を営んでいる。この季刊誌の編集長である盛田さんとは随分長いお付き合いである。国費留学で勉学に勤しんでいる氏が机に向かっている時を知らない。それでも時には外に引っ張り出して、大使館に上手いこと言って買ってもらった卓球台で遊んだり、テニスを教わったり、オペラに連れてもらった。3人の息子は恐い私よりも盛田さんの方により馴染んだ。氏の翻訳した難しい本の数々は、今も時々まくら代わりとなっている。

仕事の好敵手には伊藤忠の田路さんが居た。大抵の会社は所長1人の事務所であったが、伊藤忠と私のいる会社だけが2人駐在だった。当時若かった2人で仕事を競って取り合っていたのが懐かしく思い出される。伊藤忠の所長だった武井さんはつい最近までユーラシアスペッドの元締めであるアイロジスティックスの社長を務めた。毎年年賀状を頂いて恐縮している。思い起こすとときがない。「物」は無くても「心」の沢山ある時代であった。

また機会があればこの続編を書いて見たいと思う。私は30年勤めた商社を1999年末に早期退職し、2000年5月からブダペストに滞在している。約1年半の準備期間を経て、2002年2月3日、55歳の誕生日に家庭料理の店「大吉」をブダペスト1区に正式開店させ、現在に至っている。



聞き手 原田 知加

受賞の通知を受けたときの感想をお聞かせください。

かなり複雑な感じでした。まず喜び、誇りを感じましたが、他方で本当に私の努力がこんな素晴らしい勲章で認められるべきものだったのだろうかとの疑問も感じました。

また私を支えてくださった数多くの日本の友人、ハンガリーの同僚、34年間私と一緒に日本とハンガリーの関係の強化のために一緒に努力してくれた家内に対する感謝の気持ちもとても強く感じました。

受賞された背景に日本とハンガリーの経済と文化交流を深めたことが挙げられています。具体的にどのようなことなのでしょう

自分の努力の中で具体的に何が評価されたかのか私にはわかりません。日本との付き合いが始まったのは39年前です。その39年間、まず仕事を通じて日本との関係発展のために努力しました。両国の関係の発展が両国、また両国民のために利益になると深く信じたからです。

若いときの大使館書記官としての勤務中、ただ言われたことをきちんとやるだけではなくて、自分のアイデアをできるだけ実現しようと思いました。けれど大使館の一番若い外交官の境遇では、また共産主義国家を代表する外交官としてはその限界を強く感じました。そういう限界無しで仕事ができるようになったのが大使時代。外交活動では査証免除、生肉輸入許可を実現することができました。文化活動では日本各地で講演などを通じてハンガリーの紹介を積極的にしました。とりわけ私が努力したのは経済関係促進、特に日系企業のハンガリー進出活動であったと思っています。

在任中ホルン首相の非公式訪問に続いて、国賓としてグンツィ大統領の日本訪問を実現できました。私の大使退任の翌年2000年がハンガリー建国1000年に当るので大統領の訪日の企画と準備、日本各地での建国1000年祭の数多くのハンガリーの文化イベントや各種フェスティバルの準備、また当時の日本ハンガリー友好協会の田中理事長と共同で行った同フェスティバルの予算のための募金活動なども良く覚えています。

大使として経済外交中心に活動していましたので、任期が終わりハンガリーに帰って

きて今度は民間の立場から同じ目的のために活動することを考え、社員3人の小さなコンサルタント会社を設立しました。今年で設立からちょうど10年になりますが、2人の日本人を含め10人全員が日本語ができるスタッフが揃い、当地日系企業・進出してくる日系企業に対して充分サポートができる体制になっています。

近年の成果として、現地企業と提携し大



林組と組んで落札した地下鉄4号線の駅工事の受注があります。これはハンガリーの大型公共事業で初のアジアの企業の落札でした。大林組とは入札後も日本人社員の生活環境の設定から当地提携企業との打ち合わせ、月次決算の作成等全面的にサポートを行っています。大使時代に力を入れた日系企業の支援を最前線でやっています。

非営利的な活動は、かなりになります。80年代の外務省勤務時にハンガリー貿易大(当時)で日本の経済史を教えましたし、教科書も書きました。同時期に世界文学大辞典での日本文学に関する記事の編集も担当しました。近年では城西大学とブダペスト商科大学の提携をサポートし、その縁でこの4年間城西大学で客員教授として講義をしています。またほかの日本の大学、民間団体のために講演を持つこともしばしばあります。

またハンガリーで日本の文化を、日本ではハンガリー文化を紹介するイベントの企画、主催をしています。リスト音楽院の日本人留学生によるコンサートを毎年3月に開催しており、今年で7回目になりました。お陰様で毎回多くの日本の方々に来られ満員の盛況が続いています。また毎年少なくとも一つの日

本のアーティストによる展覧会を開催しています。今年は外交関係140周年を祝う記念の年であり、日本の美術展を三つ主催します。

日本では、毎年三つのホテルを会場にハンガリーフェアを開催しています。今年はこれ以外にハンガリーの藍染展とハンガリーの名写真家ハールの写真展も開催予定です。私は陶器が好きで大使時代に日本全国各地を回り、多くの人間国宝の方々と接し素晴らしい作品の数々を見せて頂きました。この陶芸の縁でも多くの知己を得ました。九谷焼の金沢での財団法人三谷育英会の役員は7年間になります。またハンガリーで裏千家談交会を設立、会長を務めています。

なぜ外交官の道を捨てて、民間企業人としてやろうと思ったのですか。

私の外交官としての夢は大使として日本で勤務することだったので、それが果たされた後は外交官としてのキャリアより引き続き日本との関係強化のために貢献したかった。外交官としてやった経済外交の延長線で今のような活動を開始することが理想と考えました。

外交官ではなく、企業人となって日本あるいは日本人に対する見方が変わりましたか。

大きな変化はないです。もちろん、私からみて理想的と思え相手企業にとっても利益をもたらすはずと思われる提案をしても、相手企業を説得できず断れるケースは外交官時代より多いです。しかしそれぞれの立場や責任があって、その範囲で判断すべきだと良く理解できますので、そんなにがっかりはしません。そのような数多くの経験を重ねることで、自分の説得不足な点を見つけ改善していくことで、できるだけ次回よりいいプレゼンができるように努力しています。

受賞後、ご自身の中でまたは周辺で変化したことはありますか？

いっそう努力しなければならないという認識が強くなりました。

シュディさんにとって日本とはどういった存在なのでしょう

私にとっても、家内にとっても第二の母国です。

日本および日本人から学ばれたことはどのようなことでしょうか？

とてもたくさんあります。そのいくつかあげるとすれば、物質的なものより人間としての重要性、長期的な展望に立ったものの見方、相手の立場に立ち相手を大切にすること、ワビサビの感性などです。

今後の目標、今一番したいことについて教

えてください。

目標は今までやってきたことを一日も長く続けられること。その結果ビジネスで成功できれば、いつか財団を作って日本とハンガリーの企業の賛同を得て両国に小さい「文化会館」のような施設を作ることです。

ハンガリーに居る日本人あるいは日系企業に対する率直な感想、要望があればご教示

ください。

答えにくいご質問です。しかし率直申し上げると、折角ハンガリーで仕事をする生活をするという機会を得られたのですから、もっとハンガリーのことを勉強して、ハンガリーの各地を旅行して、ハンガリー人ともっと接触して欲しいです。日系企業も、特に今のフォリント安・円高環境を活用して、より現地調達の努力を強化して欲しいです。



## ブダペスト日本人学校

### マラソンの魅力

西岡 健児

本年度は、5月に行われる予定だった女子マラソンが中止になったものの、日本人学校関係者から4月19日のT-Homeマラソン大会に52名。K&Hリレーマラソンに、19チームの57名が参加しました。昨年度は、女子マラソンに参加したのが25名、K&Hリレーマラソンに参加したのが36名でした。児童生徒の参加者だけでなく、保護者・教員も積極的に参加し、年々参加者が増え続けています。では、参加者が増え続けているマラソン大会の魅力とは何なの

でしょうか。私は、昨年度K&Hマラソンに初めて参加しました。それまでブダペストのことを知る余裕もありませんでした。しかし、このK&Hリレーマラソンに参加し、王宮・ドナウ河・国会議事堂を見ながら走ることができたことはもちろん、あいさつ程度しか覚えていなかったハンガリー語でしたが、言葉は関係なくゴールに向かってたくさんの「人」とともに走ることができたことが嬉しかったのを覚えています。

そして本年度、私は7kmのリレーマラソンに参加しました。昨年度の2.1kmよりも4.9kmも長い距離でしたが、日本人学校の児童生徒や保護者の皆様が頑張っているのも、私もレベルを上げてチャレンジしようと決意しました。当日は、すごく暑い大会でしたが、「人」と「人」が声をかけ合い頑張っています。私もK&Hマラソンは2回目だという心のゆとりがあったからでしょうか、たくさんの人と「ホイラー」と声をかけ合いゴールに向かって走ることができました。最後には、「ヤパン、イシュコラー!!!」とアナウンスしてもらったことも思い出に残っています。その後、前後に走っていた人たちと握手をし、お互いの頑張りを称え合いました。

スポーツには「人」と「人」を結びつける力があります。どんな試合で争っても試合が終われば一緒に語り合える仲間になります。マラソンも同じことだと思います。競い合っても最後には笑顔で頑張りを称え合います。これからも更に多くの方にマラソンを楽しんでもらいたいです。



### マラソンとの出会い

久世 優美子

私がこの街にきて、もう3年と3カ月になる。あつという間だった3年間には、大切な出会いがあふれている。たくさんの「初めて」があふれている。そして、マラソンとの出会いもその一つだ。

私がマラソン大会に初めて出場したのは、2年前の5月。6年生の時の担任の先生がとてもマラソン好きで、中1の春に強くマラソンを勧めてくださった。このマラソン大会に出場したことが、私を大きく成長させるきっかけとなった。そして、その後の2年間に私は女子マラソンの大会に何度も出場してきた。

しかし、今年の春に初めて出場した男女マラソンでは、正直気疲れしてしまった。今までに見たことのないほどの人の数。走っているというより、流されているような気分だった。何より、楽しくなかった。そしてもう二度と男女マラソンには参加したくないと思っていた。

ところが、今回の男女リレーマラソンは私のマラソンに対するイメージを大きく覆した。今回は初めて走るコースだったものの、距離が長くなかったので不安はなかった。それに、人が少なかったのでゆったりと気を楽しんで走れたのがよかった。これまでの私は、マラソンはスポーツ競技だというイメージでタイムを気にして走っていたが、今回は町並みや景色を楽しみながら走ることができたのだ。そして、何より初めて知ったことがあった。

これまで私は、ブダペストという街についてよく知っているつもりだった。観光としても、学習としても、たくさんの場所へ行ったことがあったからだ。しかし、それは知識としてのだけの街だったのだ。今回のマラソンで私が出会った街は、もっと身近で人々が暮らしている街だった。人々が日々生活する街だった。だけど、それは私にとっては初めて見たブダペストの姿だった。私はそんな街の姿にとっても感動した。

私はこれからも走り続けたい。この町でも、次の街でも。そうして、またあの感動に浸りたい。言葉で表すことができないほどの、あの感動に。

走ること・・・、それは本当の街と出会う一つの手段なのだ。



今年4月「みどりの丘日本語補習校」に新1年生が8名入学し、にぎやかな新年度がスタートしました。日本とハンガリーの二重国籍を持つ子ども達が増え、日本語を母語として学ばせたいと考える家庭が多くなってきているように感じています。今の補習校が立ち上がる年に入学した息子は、今年で5年生になりました。ハンガリーの現地校と補習校に通う息子の日本語学習の様子を知っていただき、一緒に考えていただけたりしたら二重国籍の子を持つ保護者としてうれしく思います。

## 有り難い補習校

我が家の長男は、毎週土曜日の午前中、補習校で国語の授業を受けています。今年は他の2名のクラスメイトと5年生の教科書を中心に年間の課程をすすめています。1年生の時から教科書を使って学習しているので自分の子が今どんな段階を学んでいるのか、どんな力をつけていくべきなのか、わかり易く私たちにはよい指針となっています。また先生という第3者が愛情を持ちつつ客観的に指導してくださるのは、本当にありがたいです(親が教えるという感情が先走ってしまうので)。教科の学習以外にも日本やハンガリーの行事、日本の歌や遊びに触れてもらうことが多いです。私も息子の話を聞いて懐かしい日本の行事を思い出したり習ってきた歌と一緒に歌ったりして楽しんでいます。

息子はバスなどを乗り継いで、補習校に一人で通っています。そのために親の代わりに先生や他の保護者の方たちとやりとりすることになります。普段は親以外の日本の大人と接することが少ない彼にとって、敬語や丁寧語を使うとても良い機会になっています。補習校は保護者の運営する学校なので親(特に運営委員の方々)がやるべきことが多くて大変です。しかし、補習校がなかったら息子は日本語の学習を今まで続けていなかったでしょう。

## 宿題

家庭での読み書きの学習は補習校の宿題です。漢字練習や作文などバランスよく出されているので宿題以外に独自の問題集をやることなどはあまりありません。我が家では宿題を終わらせないとその週は補習校にいけないということになっているので、補習校が大好きな息子は懸命に毎日取り組んでいます。

低学年のうちは、読むことを学ぶ段階なので親がつきつきりでした。私は家事がすすまずイライラし、息子は泣き出し、ハンガリー人の夫はなぜそんなに勉強しなければならないのか戸惑っていました。もっと寛大な気持ちで見えてあげられたら良かったのにと悔やんでいます。苦しかった当初に比べると、ここ1年ほどは親子ともにずっと楽になってきました。自分で一週間の宿題の量を確認し、週や1日の計画を立ててから辞書などを使って一人ですすめられるようになったためです。学ぶために読むという段階になり、毎日の宿題で学習が習慣化され、年齢が上がって集中力がついてきたのでしょう。低学年のお子さんがいて自宅学習が大変な保護者の方には、「いまが一番親の時間を費す時です、やさしく見守ってあげてください」とお伝えしたいです。

## 会話

家での息子との会話は両親のそれぞれの母語(母は日本語、父

はハンガリー語)で行っています。息子との会話はおしゃべりな父親が帰ってくるまでの数時間が勝負です。日本語の中にはハンガリー語は混ぜないようにして、単語が入ってしまったときはさりげなく聞き直し、それが何であるか説明させて日本語での表現方法を教えています。「(学校、習い事など)どうだったか」と聞いても答えが返ってこない、「今日は何が一番楽しかったか」と聞くようにしています。楽しかったことや褒められたことは話したがるので、こう聞くと授業や友だちについて話してくれるます。学校生活の中でハンガリー語でしか知らなかった言葉を日本語で説明させて、語彙や表現方法を増やしています。

## 活字

教科書の音読は毎日がんばっている息子ですが、宿題以外では日本語の活字を目にしない(読書の面白さがまだわからないのです)ので、なにか読んでもらいたいなあと思っていました。以前、二重国籍のお子さんを持つ先輩お母さまの講演会で「日本語に触れるためなら、まんがも読ませている」とお聴きし手始めに「ドラえもん」を取り寄せました。まんがはおもしろらしく「ドラえもん」の他にも次々と読みたがるようになりました。帰国時に手に入れるだけでは足りず、今はブダペストの「国際交流基金」や「日本人学校の図書館」を利用しています。

## 書く

日本語の学習のなかで一番難しいのが文章を書くことです。宿題でも作文を書くときには取り掛かるまでに時間がかかります。家庭では親子で交換日記や毎晩の食事を書き出すなどいろいろ試してみましたが、今続けているのは、日本のおばあちゃんやいとこに手紙を書くことです。返事が来るのがうれしいので、せっせと(それでも月に数通)書いています。文章の練習にもなるし、おばあちゃん孝行もできるので一石二鳥です。

## 映像

息子の一番の楽しみは、宿題を終えた後にDVDを観ることです。家にはテレビはありません。DVDだと親が見せたいものを選ぶことができるので、このままでもいいかなと思っています。日本のテレビ番組を録画したものや映画を観ていますが、ここからも弁護士ドラマでは法律言語、料理番組では調理に関する言葉などを覚えていきます。家庭では日常会話から一歩進んだ話題をさがすことはなかなか難しいのですが、DVDを観た後はさまざまな内容について話すこともできます。「干物女」など知らなくてもいい言葉まで覚えたりもしますが、親子で楽しみバラエティに富んだ日本語に接することが出来るので、DVDの視聴は欠かせない娯楽のひとつになっています。

各家庭によって日本語学習の状況や目指すところはさまざまだと思います。この原稿を書きながら、我が家にとって、補習校での体系的な学習と宿題と、家庭の中に楽しい日本語環境を作ることでうまくバランスがとれているように思いました。二つの国の言葉や文化で育つことがハンディでなく豊かな人生の助けになると良いかと願っています。ハンガリー人であり、日本人であるという意識を持って育ててくれたらうれしいです。

# 留学生自己紹介

## 卒業を目前にして リスト音楽院大学院ヴァイオリン専攻 井上 奈央子

私は5年間の留学生生活を経て修士課程をまもなく修了します。このように長い期間留学し勉強に時間を費やせた背景には、尊敬する先生方との出会いがありました。

日本で音大を卒業し演奏活動をはじめていた留学前、小林研一郎先生のオーケストラに幾度か参加する機会があり、さらに室内楽の演奏を聴いていただく機会がありました。

「この先もヴァイオリンを弾いていて良いでしょうか。」そんな弱気な私の言葉に、先生は背中を押してくださいました。留学してからも、来洪のたび、リハーサルの様子やコンサートで満

員の聴衆に喝采を浴びる小林先生の姿に、いつも力をいただいていた。

ヴァイオリンの師匠のサバティ先生からは、プロフェッショナルの演奏の準備の仕方とメンタルの強さに特に影響を受けました。初めての日本人門下生で最初はわからないことも多かったのですが、先生は分け隔てなくいつも明るく接してくださいました。現在では5人の日本人留学生がクラスで学んでおり、にぎやかでお互いに刺激を受けています。

日本ではソロ中心に勉強してきたので、室内楽の経験も増やし仲間信頼を得る音楽家になるというのを留学時から目標としていました。

その室内楽ではピアニストのグヤーシュ・マルタ先生に出会うことができ、音楽的に非常に深いものを学ばせていただいています。先生の室内楽クラスに在籍するレヴェルの高いさまざまな楽器の学生に学ぶことも多く、厳しさを持ちながら魅力的な演奏をする先生は女性音楽家として私の目指したい憧れの姿となりました。マルタ先生の「バロックもやってみない？」という勧めでチェンバロとのバロックソナタを古楽のオルフェオ管弦楽団のヴァーシェギ先生の下で勉強することになったのも音楽の理解を



深める大きなきっかけとなりました。

ソロの勉強と同時進行で、弦楽四重奏、ピアノ三重奏、ピアノ五重奏をはじめ、さまざまな楽器の編成で室内楽を経験して、いよいよ卒業の年になってしまったのですが、卒業演奏会でフランツ・リスト室内楽団と共演することができたのは、思いがけない恵みとなりました。

指揮者を立てないで、小編成で世界トップクラスの生命力に満ちたアンサンブルをする彼らの演奏はいつも私の憧れでしたし、留学中勉強しようとしてきたことの延長線にあるもの

だったからです。私はせつかくの機会なので室内乐的な魅力を出せるベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲にチャレンジすることにしました。

リハーサルでは弦楽器群と管楽器群が向かい合って座り、その中心に私が立って演奏しアンサンブルを整えていきました。リハーサルはもちろん、5月27日のリスト音楽院大ホールの本番の舞台上でさえ、背中から聞こえてくるオーケストラの演奏に新しいアイディアが湧いてくるような至福の時間でした。

その後続いた3回の本番にオーケストラのエキストラとしてリスト室内楽団に参加させてもらうことができました。20日間ほぼ毎日彼らと演奏を共にするようなチャンスを得られたので、緊張の中少しでも多く吸収したいと思いました。メンバーそれぞれがすばらしい音楽家で、当たり前にかけてしまふレヴェルがとにかく高いというのを、改めて感じました。

今、ひと段落しこの文章を書いています。今後はこれまで学んだことを生かし、現場でさらに勉強していけたら幸せだと思います。これまでの留学生生活を支えてくださった皆さまに、心から感謝を申し上げます。

## 素晴らしいハンガリー作品を、 もっと日本へ！ 2009年度 故・岩城 浩之(指揮者)賞受賞 クラリネット奏者 豊永 美恵

私がハンガリーを始めて訪れたのは、2001年夏の事でした。後の師匠となるDittrih Tibor先生の噂を聞き、レッスンを受けにブダペスト近郊で行われたクラリネットフェスティヴァルに、ただ一人で参加するためです。7日間という短い期間でしたが、私をハンガリー留学へと決断させるには長いくらいでした。それくらいハンガリーの音楽に私はすぐ虜になりました。

2002年夏に留学スタートしてから約5年半の間、ハンガリーの生活を送ることになりました。幸運なことに私は人脈に恵まれ、いつも誰かに助けて頂きました。先に留学していた先輩方からは室内楽に誘ってもらい、その輪はいつの間にかハンガリー人の生徒に広がり、先生にまで広がり、沢山のひとと出会い経験をしていました。そんな中で思ったことは、やはり自分で前に進まなくてはいけないという事。留学するという事は、音楽の勉強はもちろんだけれど、メンタル的な事も私を大きく変え、自分を見つめる良い機会になりました。自分のやりたい事を実現させるためには？と言う考えから、留学中には『ハンガリー政府奨学生』や、『平成18年度文化庁新進芸術家海外派遣研修員』にも応募しましたし、それらを頂いたことで“責任”というものが出てきました。ある時、「留学っていうけれど、90%以上の人か”遊学”なんだよね。」という言葉を聞き、果たして自分はどっちなのだろう…ハンガリーで自分がすべき事は何だろう…この先、音楽を通じて私ができることは何だろう…と立ち止まって考えたのです。

私の日本の先生方が、フランス留学から帰国され、その後いくつものフランス作品を初演され、それが今日では誰もが演奏するレパートリーになっています。ならば、私もハンガリーの作品を日本に紹介し次の世代へ渡さなくてはならないのではないだろうか。

それまでに私は、F.Hidas氏のクラリネットソナタを世界初演させて頂き、その他の作曲家の初演に係わる事が幾度となくあっ



ハンガリー語の楽しさを絵本へ  
内川 かずみ



私はもうとっくの昔に留学生ではなくなりましたが、原稿を書いてみないかとお誘いいただき、久しぶりに昔の記憶をたどることになりました。

2000年4月、大阪外国語大学(現大阪大学)ハンガリー語科3年生を終えた後、休学して1年間ハンガリーにきました。優等生でもなんでもなかった私は奨学金も受けられず、親のすねをかじりながら語学学校に通っていました。

毎日午前中だけ授業があり、午後のうちで勉強したり、ブダペストのいろんな場所を見て回ったり、友達と会ったりして過ごしました。何をやっても「勉強」になったので、毎日がとてもおもしろかったです。

ルームメイトは日本人でしたが、ハンガリー滞り歴が長い人だったので、家の中では日本語禁止にさせてもらっていました。外で会うときは日本語OKで、一緒に家を出たとたん「さっきのあれ、どういう意味？」と質問攻め。今思うと日本人2人のハンガリー語会話は滑稽ですが、あの時は真剣でした。

留学の後、いったん日本に帰って卒業し、紆余曲折を経て現在はELTE大学の日本学科で日本語を教えています。3年がたちましたが、まだまだ本当に試行錯誤の日々です。でも、学生たちは非常に熱心かつ優秀でこちらが学ばされることも多く、この仕事に就けたことをとても幸せに思っています。

この場を借りて宣伝させていただきたいのですが、私たちは「ニハハ・クラブ」という、日本人とハンガリー人の交流会のようなことをしています。不定期にしか行っていませんが、よかったですら遊びにいらしてください。http://nihahaclub.exblog.jp/

また、昔からの夢に「絵本に関わる仕事をする」というものがありました。ハンガリー語と結びつけ、留学後、ハンガリーの児童書の翻訳を始めました。「こつこつ訳し続けて、おばあちゃんになってからでもいいから、いつか出版に至ったら嬉しいなあ」と思っていたのですが、ハンガリーには実はすばらしい本がたくさんあり、これまでに「犬のラプダとまあるい花(原題Labdarózsa、富士山房インターナショナル)」「とんぼの島のいたずら子やぎ(原題A szitakotók szigetén、偕成社)」「ふたごのベルとバル(原題Bertalan és Barnabás、のら書店)」の3冊を世に出していただくことができました。特に「とんぼの～」はつい最近、厚生労働省関連の「児童福祉文化賞特別推薦」という賞をいただき(同賞を「崖の上のポニョ」も受賞)、単に「未知の国ハンガリーの絵本」という位置づけではなく内容をちゃんと見ていただいた上での受賞ということで大変嬉しかったです。

もともと、ハンガリーという国は実は自分で選んだわけではありませんでした。でもこの国には夢をかなえさせてもらい、それ以上の経験までさせてもらっています。「せっかく勉強しているんだから、一度見てきたらどうだ」と留学に送り出してくれた両親には感謝の思いがとても言い尽くせません。今後も自分の出来ることを精一杯やっつけていこうと思っています。

たため、その事からも”ハンガリー人作曲家によるクラリネット作品“の研究をしようと決め、名曲ながら演奏される事の少ない作品なども集めました。すると、おのずと作曲家の意図を理解するためにはハンガリーの文化を知る必要があり、ハンガリー語もまたそれまで以上に必修となったのです。

そんな時に、ブダペストを訪れたNHK交響楽団コンサートマスターの篠崎史紀さんと、ブラームスのクラリネット五重奏を一緒に演奏する機会がありました。この曲の2楽章にはブラームスがジプシー音楽をヒントに書いたフレーズがあります。そこを私なりにハンガリー訛りのアプローチで演奏したところ、それを面白がってかどうかご本人に確認していませんが、その後も何度もご一緒させて頂く事にもなりました。日本に帰国して1年経った今年、その他のN響メンバーの方々と一緒に「2009年都民フェスティバル・室内楽シリーズ」や、つい先日6月6日にも、ハーモニーホールふくい主催「6月の宝石ドナウの真珠-豊永美恵とN響トップメンバーが贈るハンガリーの調べ」と題した演奏会で共演してくださいました。福井での演奏会では、日本初演となる「R.Kókaiのクラリネット四重奏」も取り上げ、少しずつですが作品紹介が出来ようとしています。

このような、初演作品への取り組みも評価の一つとされて、この度「2009年度岩城宏之音楽賞」を受賞致しました。賞を頂いた事で、これまでハンガリーで学んできた事、私がやりたいと信じてやってきた事が間違いでは無かったと確信し、自信を持って次の一歩を踏み出せるような気がします。また、この賞を通じてハンガリーという国に興味を持って下さる人がいることを願っています。12月に東京文化会館で行われるリサイタル、日本演奏家連盟主催「演連コンサート」でもハンガリー人作曲家の作品を中心に演奏します。



”音楽というかけがえの無い財産を今の時代で途切れさせないよう、少しでも多くの人に知ってもらおう”

これが、私に沢山の事を与えてくれたハンガリーへの恩返しとなるよう、これからも私の声となるクラリネットと向き合っていきたいです。

7月～8月お勧めコンサート

桑名 一恵

シーズンオフに入り在ハン日本人演奏家の皆さんの多くは夏休みの為、日本に一時帰国しコンサート活動を精力的に行う演奏家達の日本でされるコンサートも含めて御紹介いたします。ご帰国の際に、是非お立ち寄りください。尚、ハンガリー国内では、様々な夏の音楽祭が開催されます。

《ハンガリー国内お勧め情報》

♪ 6月12日-8月30日 ブダペスト夏の音楽祭 (マルギット島野外ステージ) www.szabadter.hu

♪ 7月10日-8月15日 ハイドン・エステルハージ宮殿音楽祭 (FERTŐD) http://haydn-2009.hu/

♪ 7月13日-8月10日 ヴァイダフニャディ城(英雄広場) http://www.vajdahunyad.hu

♪ 8月7日-16日 ゼンプレーニ音楽祭(Sárospatak) http://www.zemplenfestival.hu/

♪ 7月2日-8月18日 ブダフェスト夏の音楽祭 http://www.budafest.hu/ e-mail: propart@chello.hu

♡ ピアニスト 桑原 怜子さん

♪ ジョイントコンサート  
”コルプストロンボーン四重奏団と共演”  
日時 7月15日(水)午後4時開演  
場所 ブダペスト (ハンガリー)VIII, Koris u.13.  
”a Kulsovarosi Templom”

♪ コルプストロンボーン四重奏団  
桑原怜子 ジョイントコンサート  
～ハンガリーからの調べ～  
日時 7月26日(日) 午後2時開演  
場所 舞鶴市総合文化会館小ホール (京都府)  
お問い合わせ Music Studio M 090-5152-0693  
後援 リスト音楽院友の会 / 日本トロンボーン協会

♪ ソロ&2台ピアノによるデュオリサイタル

共演 安達朋博  
日時 8月1日(土)午後7時開演  
場所 遊音堂YOUホール(大阪)  
お問合せ ミュージック・アート・ステーション  
Tel&Fax 06-6858-0084  
日時 8月6日(木)  
場所 真鍋記念館クララザール(岐阜市)  
主催 リスト音楽院友の会



♪ ソロ&2台ピアノによるデュオリサイタル  
日時 8月12日(水)  
場所 杉並公会堂小ホール(東京)  
お問い合わせ プラネット・ワイ TEL.(03)5988-9316

♡ ヴァイオリニスト 大迫 綾香さん



日時 8月9日(日)14:00開演  
場所 可児市文化創造センター(岐阜県)  
共演:松永 みなみさん  
お問い合わせ:0574-65-4786  
後援:東京音楽大学岐阜県人会

♡ ピアニスト 中村 美貴さん  
浅野 衣美さん  
松永 みなみさん  
ヴァイオリニスト  
大迫 綾香さん

日程 8月11日(火)18:30開演  
杉並公会堂小ホール(東京)



※在ハン演奏家コンサート最新情報はブダペストネットワークにて、随時掲載中です。http://bpnet.web.fc2.com/

《お知らせ》2009年度12月まで

日本・ハンガリー友好年を記念いたしまして、在住日本人留学生・音楽家及び両国に親交のある音楽家に声を掛けさせて頂き「友好年記念オーケストラ」が今年度限定結成され年に数回のコンサート開催・予定しています。  
スポンサー・後援・出張演奏依頼・年間会員など随時募集しております。是非サポートご協力お願いいたします。  
お問い合わせ:Propart Hungary Bt(企画:桑名)  
Tel: +36-1-7867846 / +3670-3815548  
e-mail: propart@chello.hu



## スポーツ行事・運動サークル情報

### バドミントン部(新設)

現在、拠点となる場所を設定中です。既に4、5人の入部希望あり、コートが確保出来次第活動を開始しますので、入部希望者は運動部まとめ役：飯尾(Tel:225-3965又はe-mail:daikichi@mail.datanet.hu)までご一報ください。

### ソフトボール大会(商工会主催)

#### 5月10日行われた2009年度春季大会の結果

優勝：笑好会チーム(初優勝!)、2位：住友商事チーム  
「いやぁ～、優勝しちゃいました。苦節?年、ええ念願でした。えっ、優勝コメント?とにかく嬉しいっす。嬉しいのひとことです。秋の大会では連続優勝を狙いたいと思います。チームの皆さんお疲れさまでした」(TDK/成田監督談)

### ゴルフ部(まとめ飯尾欽哉)

#### 月例会結果(毎回30名前後参加。括弧内はハンディキャップ)

3月29日 優勝：分田宗広(24)

「その日は曇り時々小雨、暑くも寒くもないほぼ無風の絶好のゴルフ日和でした。そのせいか、グロスで80台が4名も出るなど皆好成績で、私が勝てたのは「運が良かった」の一言に尽きます。ゴルフを始めて約10年ですが、10回に1回くらいは天から運の女神が下りてきて背中にとまることあるようで、その日のパターンはよく入るし、「しまった」と思ったボールもハザードを外れて、何とか打ちやすいライで笑顔で私を待っていてくれました。お陰で、24あったハンディが一気に14まで減らされて、今年の再優勝の望みは完全に絶たれましたが、今度は何とか実力で前半、後半共40台で回りたいと、週末はせっせと励んでおります。また副賞でいただいたカーナビも最近は使い方に慣れてきて、旅行では大活躍。クラリオン様に感謝しております」(分田記)

4月26日 優勝：坂梨正典(27)

「前日のマッチプレー大敗(記録に残る7-5)ショックで病欠(もちろん仮病)も考えた第2回日本人ゴルフ部月例会大会ですが、優勝してしまいました。スコア的には第1回より1打多く、全く想定外のことでした。同伴競技者に恵まれたこと(改めて深謝申し上げます)、前日の余韻で野望が無かったこと、素直にパットが打てたこと、あたりが勝因でしょうか。思い返せば、ゴルフを始めて早25年、優勝の二文字には全く縁がなく、苦難に溢れた道程でした。最初は「うまくなる」と言われ、その気になっていましたが、そのコメントも「大器晩成型かな」と次第にトーンダウン、最早一等賞になれる日は永遠にないものとあきらめてい

ました。ところが、昨年末のゴルフ部忘年会で皆様のゴルフに対する純粋な情熱を知り、2次会でも刺激(?)を受け、一念発起で早速素振りを開始、今では毎晩の日課(と言っても2-3分ですが)となっています。人間やればできる、ゴルフも間違っって優勝してしまう、日本人会もきくと蘇る(あ、これは関係ないですね)、との思い込みが強くなる今日この頃です」(坂梨記)

5月24日 優勝：安藤永一(30)  
「まぐれです」(安藤談)

6月21日 優勝：児玉佳久(20)

#### 第10回「大吉杯」マッチプレー選手権

##### 4月第一週から始まった熱き戦いの結果

優勝：飯尾選手(大吉、HCP.11)、2位：平松選手(住商、HCP.9)、3位決定戦：宮崎選手(日清食品、HCP.9)対高濱選手(東洋シート、HCP.22)  
「第11回大会」は8月から3ヶ月をかけて行います。参加者募集!

#### 第1回「アラカン(阿羅漢)杯」(6月28日)開催

優勝：飯尾(大吉)、2位：岡崎(RYOWA)、3位：高濱(東洋シート)  
アラウンド還暦、しかも漢字に転換して阿羅漢。還暦に困んで全員が赤いウェアを着用。ボールまで赤。お遊びの結果、オネストジョン賞は町野(スズキ)氏がゲット。

#### PANNONIA WORLD CUPで日本選抜Bチームが初の世界制覇!

昔から「ハンガリーでは世界一!」という言葉がよく使われていた。No.1 in the worldではなく、World No.1 in Hungary。

「①主催者がPGCCから医療関係の民間企業(FirstMed Center Kft)に変更、②欧州、米州、韓国、日本の4地域対抗戦から各国対抗戦(ハンガリー、オーストリア、フランス、チェコ、スロバキア、アメリカ、ロシア、韓国、日本など)に変更、③参加枠も12名から8名に変更となった。従って、初優勝を狙う日本チームには、出場選手の厳しい選考が求められ、佐々木監督(ユーラシアスピード)、阿部コーチの下、日本Aチーム：「辻(住友電装)、平松(住友商事)、佐々木(ユーラシアスピード)、直江さん(主婦)」、日本Bチーム：「町野(マジャールスズキ)、江森(ソニー)、古川(菱和)、宮崎(日清食品)」の精鋭8名で臨んだ。ステイブルワールドポイント方式に拠る団体戦の結果、当日の天候(快晴、微風)やHDCPに若干恵まれたせいもあるが、日本Bチームは大方の戦前予想に反して、町野・江森両選手の活躍に抛り、日本Aチームも押しのけて初優勝を遂げた」(宮崎記)

#### 四カ国ゴルフ対抗戦(7月12日ウィーン郊外)

今年5回目となるこの対抗戦、昨年はスロバキアチームが優勝。ハンガリーチームは昨年の雪辱を期して選抜された12選手が全力を振り絞る。(昨年は前の晩に飲みすぎた酒を降り絞っただけ)

### テニス部

#### (新入部員歓迎募集中!)

一昨年に続き、第2回ウィーン・ブダペスト交流戦が5月23日にウィーンで開催され、ブダペストからは、前回の敗戦の雪辱を果たすべく総勢27人で参加しました。

交流戦は、男子ダブルス・女子ダブルス・混合ダブルスの全15試合で行われ、お年寄り相手にパワー全開で攻める非人道的な人、息の合ったコンビネーションプレーをみせるご夫婦など、それぞれの日頃の練習の成果を存分に発揮し熱戦を繰り広げました。

私自身も、いつもと違う緊張感の中でプレーすることにより、テニス部だった学生時代の集中力が戻って来ました。が、しかし、体がついてこない。。

試合結果は、ブダペストの5勝10敗と前回の雪辱を果たすことは出来ず、あえなく惨敗に終わってしまいました。

試合後はウィーンチームと合同で打ち上げを行い、おいしいスペアリブを食べながらのテニス談議に華を咲かせ、とても楽しい時間を過ごす事ができました。

第3回を是非とも開催し、今度こそ雪辱を果たしたいと思います。土曜午後の部、日曜午前の部、日曜午後の部と3チームが活動中。景気後退に伴う帰国・転任が相次いでいます。

### ランニング部

日本人学校の児童を中心に、各種大会に参加して盛り上がっています。

4月19日のウィーン国際マラソン大会には、ブダペストからハーフマラソンの部に盛田、本田雅英・宏子夫妻が、フルマラソンの部に江淵泰久さん、ジュニアマラソン(4km)に江淵ジュニアが出場しました。以下が公式記録。

#### ハーフマラソンの部

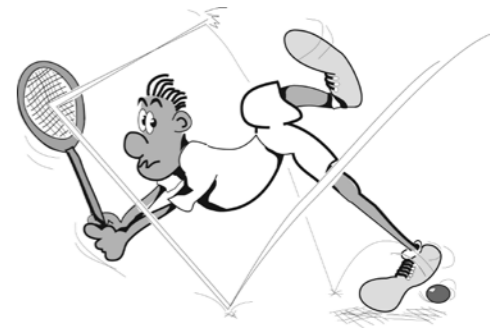
盛田 常夫	1時間36分04秒
本田 雅英	2時間32分46秒
本田 宏子	2時間32分46秒

#### フルマラソンの部

江淵 泰久	3時間51分53秒
-------	-----------

「自宅から250kmも離れたところで開かれる大会に出るのは初めてのこと。ウィーンの街並みをわが足で闊歩できるという魅力に惹かれて、今回の参加を決めた。

レース開始は朝9時。合図の後、1万人超のランナーが一斉にスタートした。走り始めてすぐ、自分の体がずいぶん重いことに気がついた。無理もない。前日、長丁場にバテないようにと、自分の大食い本能の手綱を少々緩めてしまった。ご飯2合と卵焼き、餃子とラーメン・ライス、それにスパゲッティーの大盛とサンドウィッチ。1日かけてたっぷり炭水化物をとった。それらは(予定外にも)全てまだ胃に残ったままだ。どうにも重



い。お気楽モードから一転、悲観的な結末が頭をよぎる。完走できなかったらどうしよう・・・?

高い目標を持って臨んだわけではない。ただ半年前に走ったタイムは超えたかった。ましてやリタイヤなんぞもってのほか。

昨年秋ブダペストでもマラソン大会に参加した。準備期間がなかった当時に比べ、今回の方が条件はよいはず。遅くなる言い訳が見つからない。「満腹でリタイヤ」とは何とも格好悪い。「完走だけならなんとかなる」と軽く考えていたが、にわかにあせり始めた。顔を上げて標識を確かめる。なんとまだ38kmも残っているではないか。

前半は郊外から街の中心に向かうコース設定。フルマラソンの走者は、ハーフ走者と、きらびやかな目抜き通りを一緒に走り抜ける。王宮がゴールの彼らと別れた後に、我々は改めて街を背に郊外へと向かう。最終的には再び郊外から中心部に戻ってゴールなのだが、この郊外へ向かうあたりは目玉のない普通の風景が続き、集中が途切れる。急に人が減り、刺激が減る中、疲労は容赦なく足を襲う。郊外の折り返し点、プラッター公園を通る300km前後は地獄だった。出たい、とここに来て主張されても困るのだが、ただ胃に留まっているだけでムダに地球の引力を引き寄せる「おもり」どもには閉口した。

最後の3kmは意地で走った。マラソン大会では、仮装して走る人が時々いる。微笑ましいものの、いかにも「楽しんで走っています」という彼らに軽く追い越されるのは正直あまり気持ちいいものではない。ゴール直前で捕らえた、シルクハットの英国紳士風ランナー。わが死力を尽くして追い抜いた。ムキになる「ちいさい」自分を悟られない様、精一杯普通の顔を装いながら。

ゴールと同時に足は棒の様に動かなくなった。朝から観戦していたのに、途中ずっと走る姿を見逃してくれた我が「のんびり家族」もゴールではフラフラの自分を見つけ、暖かく迎えてくれた。前半、不調で勢い込んで走れなかった分、結果的には全行程ずっとイーブンペースが保てた。5kmごとのラップタイムはすべて平均値±10秒以内の誤差に収まった。完走。そして前回より少しだけタイム短縮。よしとしよう。

自分の足で辿り着き、垣間見たオペラ座やシェンブルン宮殿、王宮。ずいぶん和やかな顔をしていた。車のない道の真ん中から眺め、彼らを身近に感じた。皆と少しお近づきになれた気がした。

アウェーの中、同日開催されたキッズレースに参加し、本気の地元っ子らに気圧されたわが息子は不本意だったらしい。満足する父親のとなりで凹んでいた。彼をしっかりと口説き落とし、できればまた一緒に参加したい」(江淵泰久記)



## 釣り部

(新入部員募集!)

ハンガリー釣り協会によると、ヨーロッパ全体の釣り人口は2,500万人以上。2007年のハンガリーの釣り人口は33万7,000人となっており、総人口約1,000万人の小国にしては結構多い?(総人口比3.3%)のかと思いきや、インターネットでたまたま見つけた(財)日本釣振興会の資料だと日本の釣り人口は1670万人(2002年のデータ)だそうで、総人口の13%が釣りを楽しんでいる日本と比較すると釣り人口の割合はかなり少ない。ちなみに、北欧諸国の釣り人口の割合は50%以上ということなので、ハンガリー人にとって釣りはそれほど馴染みのあるものではないことが分かった。

カルパト盆地の平野部をなすハンガリーには、中央のドナウ川と東のティサ川という大河川が2本流れており、釣り場にも大きな影響を及ぼしている。

釣りのメインスポットとして真っ先に挙げられるのが、ハンガリーの海と呼ばれるおなじみバラトン湖である。東京23区(約600km<sup>2</sup>)ほどもある広大な面積を誇るうえ、平均水深3mと比較的浅く、ボート釣りなども適した条件といえそう。対象魚はコイ、ウナギ、ソウギョのほか、肉食のナマズ、パイクパーチ(スズキ目)、パイク(カワカマス属)などがおり、確かに湖にいくとコイ釣りの人に混じって、ルアーを投げている釣り人の姿を見かける。ハンガリー料理のレストランに行くと、たまにバラトン湖産のパイクなどがメニューにあるが、養殖でもしているのだろうか?それほど魚影が濃いようには見えないし、どのように魚を調達しているのか疑問である。



続いてのメインスポットは、東のティサ湖である。同湖は、国内で二番目に大きな湖(127km<sup>2</sup>)で、自然保護区に指定されているだけあり動植物にとって恵まれた環境だ。私はホルトバージュに行った際に通り過ぎただけだが、開発された尽くしたバラトン湖と違い野生がそのまま残っている様子を見て、しばらく眠っていた釣り人の本能がくすぐられた気がした。他にもブダペストからわずか40kmのVelenca湖や、ドナウ川の支流など多くの釣り場が同協会のサイトで紹介されている。

なお、統計(1997年~2007年)によると、ハンガリーの釣り場で放流されている魚の81.8%はコイである。重量32kg以上の怪物も上がっており、ハンガリーでは「釣り=コイ釣り」といっても過言でないだろう(和波拓郎記)。

### 月刊メールマガジン

- ・ハンガリーのニュース、
- ・オペラ・バレエ、
- ・コンサート、
- ・イベント、
- ・日本人コミュニティのお知らせなど



登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。

Japan Coop Kft.  
1025 Bp, Cimbalom u. 7.  
Tel.: 345-0450 Fax: 345-0008  
e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu  
ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/

### 編集部よりのお知らせ

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。http://www.danube4seasons.com

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法: 事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。  
BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 http://www.byool.com

★お問い合わせ: 上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

#### 日記・エッセイ



自分のページを持てる。  
日記、エッセイ、ブログ、  
記録として。

#### コミュニティ



同じ興味・関心を持つ  
仲間との交流の場。  
OB/OG会にも。

#### 豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、  
そこから生まれる新しい  
発見や気づきが、  
人生を豊かに輝かせるものに。

#### 安心・安全



無料会員制。  
SNSのメンバーだけが利用  
できるクローズドなサービス  
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

### BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。BYOOL Selection: http://byool.open365.jp/



CI、広告、ロゴ、ホームページ等  
名刺1枚からご希望の言語にて  
デザイン致します。  
各種パッケージ、インテリアのデザイン、  
内装工事、翻訳から印刷まで  
幅広く受け承っております。  
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu  
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.  
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

## Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネジメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ/仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、  
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.  
Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6  
Tel&Fax: +36-1-786-7846  
Mobil: +36-70-3815548  
e-mail: propart@chello.hu  
web: http://propart.client.jp/





# KOBAYASHI Ken-Ichiro & IKEDA Riyoko Collaboration Concert

July 9th, 2009, 7:30 pm  
Beethoven, Symphony No. 9  
Bela Bartok National Concert Hall,  
the Palace of Art, Budapest

July 13th, 2009, 8:30 pm  
Mozart, Requiem  
Stephansdom, Vienna



## **Soloists**

Soprano Riyoko IKEDA Alto Gako SUZUKI  
Baritone Takahito ASAI Tenor Jozsef MUKK

## **Orchestra**

MAV Symphony Orchestra

## **Choir**

Manatsuni Daikuwo Utakai  
Hungarian National Choir